

「苑」この人に会いたい
作家
山本一力さん (68 歳)



山本一力

第126回直木賞を受賞した「あかね空」をはじめとする時代小説を中心にハイペースで作品を発表し、現在20本の連載を抱える売れっ子作家。テレビのコメンテーターとしても活躍する山本さんの生き様に迫った。

「いかに人というものが素晴らしいか、人間に絶望するのではなく、明日は味方なんだとわかつてもらえる小説を書き続けるのが、物書きとしての私の役目だと思っています」

作家を目指した理由は借金の返済

「真相報道 バンキシャー」などのテレビでもお馴染みの、低音の落ち着いた声で時には静かに、時には熱く語る姿が印象的な山本一力さん。53歳の時に「あかね空」で第126回直木賞を受賞し、現在も多数の連載を抱えて多忙を極める山本さんだが、作家になるまでの経緯は波乱万丈だった。高校卒業後、トランシーバー会社で品質管理、旅行会社で企画・添乗・広告宣伝、広告制作会社で営業、コピーライター、デザイナー、制作会社経営、商事会社など様々な職種を経験。事業の失敗で作った2億円の借金返済のために46歳で作家を目指したという。

「サラリーマンの給料で払える金額じゃないですから。自己破産したらどうだという話もあったのですが、それをやると相手の方が私に返せとも言えなくなると聞いて、それは筋が違うなと思ったんです。やはり借りたものは一生かかっても返すのが当たり前で、法律がどうであれ、チャラになって知らん顔なんてそんな馬鹿なことではないですよ。じゃあどうやって返すかとなった時、資本もないし自分でできることを考えたら原稿を書くことだと思い当たったんですね。本を読むのとはにかく好きで、日本にも外国にも好きな作家さんがたくさんいたので、大きなベストセラーが出たら借金を返せるという夢みたいな話でした。

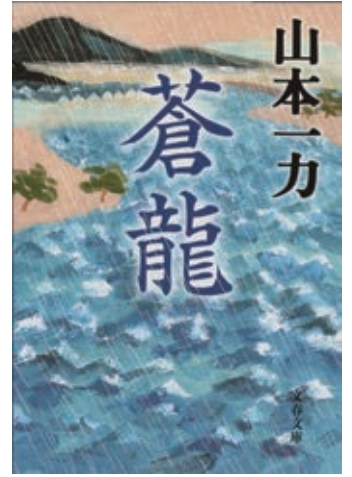


原稿を書くということは身近にありましたが、小説を書いたことはなかった。作家になると債権者の人に話をしたら、みんなに『なに考えてるんだ』って呆れられましたね(笑)。『やろうよ』と言ったのはかみさんだけでしたけど、幸いなことに他の人も『馬鹿野郎、やめろ』とは言わなかったんですよ。これは日本人が物事を判断する時に非常に大事なところだと思いますが、駄目と言われなければイエスとノーの間には無限大の可能性

があるんです。やろうとする人間は、『やめろ』ではないことをチャンスと捉えればいいわけじゃないですか。大事なのは、決めたことをどこまでやり通すかということ。ここで答えが出てくるでしょうね」

大事なのは「やり続けること」

現在は新人賞を選考する立場になっている山本さん。駆け出しの頃は、様々な新人賞に応募したが受賞には届かず、オー



第77回オール読物新人賞を受賞した「蒼龍」と4篇を収録

ル読物新人賞を取るまでには3年かかったという。

「それまでコピーライターの原稿や取材の原稿を書いたりしていましたけど、小説は未体験でしたから、やり始めてみたらわからないことだらけでした。でも待つてくれている人がいると思ったら、私はやると言ったことをやるだけです。中学の時に上京して住み込みで新聞配達をしていた時、『目の前のことを終えないことには次の一步を踏み出せない』ということに体で覚えていましたね。

最初に応募した作品が最終選考にいった時は、もう作家になったような気分でした。でも全く通用しなくて。一回どん

底というかゼロベースになって、本当にやらなければと思ったのはそこからでした。なめてかかってできることじゃない。だからその後、3年の間に6作を応募しているんです。どれも駄目でしたが、97年になんとか新人賞に届きました。それはやり続けたからでしょうね。それ以外ありません。

今は選考する側において、今年の選考の中には去年も応募してこられた方がいました。残念なことに賞には届かなかったけれど、途中でやめてしまったらゼロですから、それを続けて精進して、去年も今年も駄目だったけど明日は味方だと思っていれば、やれるでしょうね。私は借金



中学時代の新聞配達

の返済がスタートになって今に至っていますが、やらずにただお祈りしていても無理ですから、とにかく人はやり続けていればいいんですよ。

マラソン選手が言っていたことだと思うけど、「稽古は人を裏切らない」というのは見事な言葉だと思う。今の私もそうですよ。月に20本の締切を抱えて毎日書いて、出張先でも書いています。でもね、書いていることが一番の心の安定で、やっтерるぞっていうことが支えになっているんです」

時代小説の魅力は言葉の美しさ

山本さんといえば時代小説の大家。直木賞受賞作「あかね空」では、江戸時代中期の東京・深川を舞台に、豆腐職人とその妻が辿る波乱万丈の人生模様が夫婦親子それぞれの絆を軸に描かれている。主に山本さんの作品は、仕事、義理、人情、愛憎などがテーマとなっており、時代を超えて読者の共感呼びながら物語に深く引き込む独特の作風が、多くの人を魅了している。

「時代小説を選んだ理由は、きれいな日本語が使えるからです。カタカナの全く入り込めない世界ですから、時代小説を書くことで、非常に自分の文章研鑽ができたなと強く思います。カタカナなどの現代語を置き換えられない時は、自分で言葉を作るんですよ。これは池波正太

郎さんが名手で、池波さんが書かれている言葉には見事な発明がいくつもあります。だから私も適した言葉がない時は心して自分で作っていて、その方が物語に馴染むんですね。例えば池波さんの『鬼平犯科帳』の読者は、百人いれば百人とも盗みのことをお盗め^どって言うんですよ。そういうふうには池波さんの発明した言葉が一般名詞のようなどころまで消化されたのは素晴らしいことだし、世の中に成した大きな成果でしょうね。

私は現代小説も書いていますが、大事なことは人間を描くこと、作者が生きてきたことや、これから先のこと、世の中に横たわっていることを、どう捉えて消化していくかなんですね。説教をたれるだけでは人は読みませんから、物書きのやることは、物語の中で登場人物の生き方として伝えて、それが読んでくれた読者の心に染み込んでいくてくれたらいいなというも思っています」

幅広い経験と知識が生んだ人生観

作家になる以前は、単純作業から営業、コピーライターやデザイナー、会社経営まで実に多彩な職種で研鑽を積んだ山本さん。その幅広い人生経験と知識は、コメンテーターとしても必要とされている山本さんならではの人生観につながっている。

「私は会社をいくつも辞めたけれども、自分の中に矜持として持っていたのは、



デビュー作「損料屋喜八郎の始末控え」からスタートした損料屋喜八郎シリーズ。武士の心と商人の知恵を持つ喜八郎が繰り広げる頭脳戦は人情味と後味の爽快感が秀逸





第126回直木賞を受賞作。2007年には
浜本正機監督により映画化された

『給料以上の仕事は絶対にやってきた』ということと、『会社からお前はもういらな』と言われたことはなかった』ということなんです。決定を相手に下されるか自分で下すかというのは、自分の生き方の一番の源だと思うんですよ。相手に決められて泣きつくようなことになったら自分の生きる力がなくなると思うし、自分で物事を決めてやっていけば決断したことを解決する力が自分の中にあるんです。

デザイン会社にいた時は、もっとレベルの高いデザイン会社で働きたい、もっといいクライアントのところへ行きたい、と色んな思いがありました。転職した後は『俺がここで認めてもらうためには自分で資産を作るぞ』と思って片っ端から新しいクライアントを当たって、自分で開拓しましたね。それが一番楽しかった。全く名前のない小さな会社だったけど、大手の電通や博報堂相手に五分に戦ったこともありました。名刺が通用する会社にしたのは、近畿日本ツーリストと嘱託していた日航商事だけです。

私は松下電器（現・パナソニック）さんにはものすごく恩義があつて、忘れられないことがあるんです。私がいた会社の社長は、普通に売り込みの電話をかけていたら『姑息なことを言うな、売り込みですとやって電話しろ』と言って聞く耳を持たない人だったので、『売り込みです』といって電話をかけるしかなかったんです。案の定、相手にガチャンと切

られたりした中で、松下のビデオ事業部の商務課長は『一回来てみる？』と言ってくれたんです。大阪だったので出張で出してもらつて、決まったからにはカタログを片っ端から見ても必死に頭詰め込んで行つたんですよ。商務課長に『御社のビデオは』って話し始めたら、課長がしめた顔して、『あなたに言われなくてもウチのビデオのことは私が一番知ってる。売り込みですと言ってウチのプラスになる企画を言いたいから時間をくれと言つたんでしょ』と言われたんです。頭をぶちめされましたね。もう一回チャンスをもらつて、その年のオーディオフエアの時にパナソニックのショーのブースをもらいました。素晴らしい課長でしたね。

そうやってクライアントに鍛えられた経験はいっぱいありますよ。人生というのは、相手とどれだけ向き合えたか、向き合うためには何か響き合うものがなければいけないし、相手に気持ち伝わっていく必死さをどうアピールできるかだと思います。やろうとすることに使命感を持って、後の世代に何をしてやれるか思いを馳せるような生き方をしていけば、その人の生き方はしっかりと定まる気がしますね」

還暦は自分を見つめ直す通過儀礼

物心ついた頃には母と妹との三人暮らしで赤貧のどん底だったという山本さん。



社会に出てからは様々な職を転々とし、プライベートでも二度の結婚・離婚と波乱があったが、40代の時に訪れた現在の奥様との運命の出会いで山本さんの人生は大きく変わる。

「物が無いとか、金がないとか、そういうことは今でも苦と思いませんね。言い方を変えれば、ゼロになっても俺は生きていくぞ、かみさんさえいればいいなっていう部分があります。若い時はわからないもので、いろんなことにブレてあれもこれもとつまみ食いするのが若さだと思

いますけど、還暦になった時には『この先どういう人生を送るんだろう』と一回立ち止まって、自分で想像するいいチャンスだと思っています。

8年前になりますが、私は還暦の年に運転免許証を返還したんですよ。還暦を迎える手前でかなり悩みましたけど、私は毎日パソコンに向かって原稿を書いているので、気づかないうちに視力が落ちていたんです。眼鏡屋さんで視力を計ったらえらく分厚いレンズが必要なことがわかって、これは普通のことではないし、仮

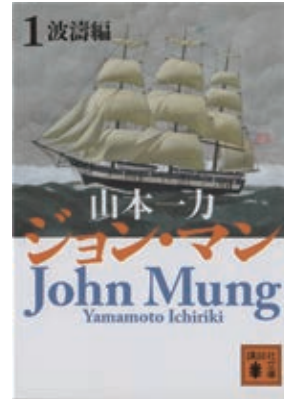
に新しい眼鏡で免許を更新したところで、運転していたら絶対に事故を起こすなと思います。事故を起こしたら、今まで味方でいてくれた新聞やラジオやテレビの人たちが、『あいつは視力が悪いのに運転してたのか』って袋叩きにせざるをえない。社会から糾弾もされるし、もしそれが人身事故だったら取返しのつかないことになる。それを想像したんですよ。

還暦60というのは、そういうわきまえを備えさせる通過儀礼だと私は思うんです。それを教えてもらったのが、運転免許のことでした。やっとの思いで取った自動二輪の限定解除も持っていたので、ほんとに辛かったんですけど、その辛さよりも『今やめたら俺は加害者にならない』という安心感の方が勝っていましたね。

近年、毎日のようにアクセルとブレーキを踏み間違えや高速道路の逆走といった高齢者の事故がありますが、これは本人が自分の年齢を自覚してこのまま運転していたらどうなるかを想像しないと、ああいった事故はこれから加速的に増えると思いますね」

小説を通して明日は味方と伝える

連載の締切に追われて多忙を極める山本さん。その中でも、奥様と一緒のスロージョギングを習慣にしていたり、毎年マンハッタンに一ヶ月滞在したり、故郷の恩師たちと交流するなど、充実した日々を送っ



土佐の先達、中浜万次郎の奇跡の生涯を描いた「ジョン・マン」、爽快オリジナルエッセイ集「大人の説教」、浅草で一膳飯屋を営む家族の細腕繁盛記「だいてん」

ている。

「物書きは体力勝負ですから、かみさんと一緒に毎日スロージョギングをやっています。連れ合いと一緒にというのが一番大事なポイントですね。デュアルタスクというのですが、いろんなことを話しながらゆっくり走る、というように二つのことを同時にやると、脳味噌が活性化するんです。これも『やり続ける』ということにつながりますが、やりたくてやっているの雨でも雨具を着て行きますし、義務だったら続かないでしょうね。体を使うことは私にとっては原稿を書くのと同義語ですから、体に記憶がたまつてないと原稿を書く気にならないんです。だから人間って全員が肉体労働者だと思いますよ。物書きなんてものは職人で、肉体労働者だと思つてますから。

高知で中学の恩師たちと毎年6月6日に66会という集まりをやつてまして、全員が80代なのですが、みんな格好よくてしびれちゃう（笑）。一番上の88歳の英語教師は赤い皮のパンツをはいてくるんですが、似合つてるんですよ。俺も88になってああ生きたいって思うし、88まで生きたいっていう元気が湧いてくるんです。やっぱり棺桶に入るまでは、背筋を伸ばして生きていきたいですね。

今後どんな作品を書いていくかは、わかりません。去年から今年にかけては、いくつか現代物を書いていきます。例えば、マンハッタンで取材したことを短編連作

プロフィール

山本一力（やまもと・いちりき）

1948年、高知県生まれ。都立世田谷工業高校卒業後、トランシーバー会社、旅行会社、広告制作会社、商事会社などで様々な職業を経験。46歳の時、事業の失敗で作った2億の借金を返済するために作家になることを決意。97年に「蒼龍」で第77回オール讀物新人賞を受賞。2000年に初の単行本『損料屋喜八郎始末控え』（文藝春秋刊）を上梓、02年に『あかね空』（文藝春秋刊）で第126回直木賞を受賞。その他『大川わたり』（祥伝社刊）『はぐれ牡丹』（角川春樹事務所刊）『蒼龍』（文藝春秋刊）、エッセイ『家族力』（文藝春秋刊）など著書多数。平成27年 第50回長谷川伸賞受賞。最新刊は、初の現代ミステリー「晩秋の陰画^{ミカド}」（祥伝社刊）。現在20本の連載を抱える人気作家で、テレビやラジオ等でも活躍中。

にまとめたのですが、現代ものを書いてみて、『あー、こういう小説書きたかったな』と思いましたね。時代小説は時代小説で、日本が激動していた弘化から嘉永、安政までの幕末を舞台にしたものを新しく書き上げました。

物書きがやれることにそんなに大きなことはありませんけれど、小説という媒体を通じていかに人が素晴らしいか、人間という生き物に絶望するのではなく明日は味方なんだと信念としてわかつてもらえるものを書き続けていくのが、物書きとしての私の役目だと思つています」